

○*Veratrum maackioides* Loesn. f. の lectotype の採集地 (山中二男)

Tsugiwo YAMANAKA: The locality of the lectotype of *Veratrum maackioides* Loesn. f.

原寛先生は Journ. Jap. Bot. 59: 231 (1984) でホソバシユロソウを *Veratrum maackii* Loesn. f. var. *maackioides* (Loesn. f.) Hara とされた。その際、*L. maackioides* の lectotype に Shikoku, Kochi Pref., Schinomiyamura? (Saida) を選ばれている。この地名はこのままではどこであるのか判断が難しく、?をつけるのも当然である。採集者は斎田功太郎博士と思われる。この Schinomiyamura はおそらく Ichinomiya であろうということを先生にお知らせしたところ、そう考えてまちがいあるまいとご返事があった。そこで、これについて少し説明しておく。

Ichinomiya とすると、漢字では一宮になる。愛知県一宮市のように、これをイチノミヤと読むのは普通で、千葉県そのほかに今ある 5 町や他に併合された旧町村も同じである。ただ、高知県の場合はイックとよんでいて、もとは土佐郡一宮村であったが、現在は高知市一宮になっている。一宮の地名はそれぞれの国の一ノ宮の所在に由来し、高知県の一宮にもその土佐神社がある。とくにことわらなければ、県外の者が一宮をイチノミヤと思うのは無理もない。それをローマ字で手書きしたとき、I が J のようになると S とまぎらわしい字体になることをあわせ考えると、この Schinomiyamura は今もそこにホソバシユロソウが自生している高知市一宮と断定しても問題はないと思う。

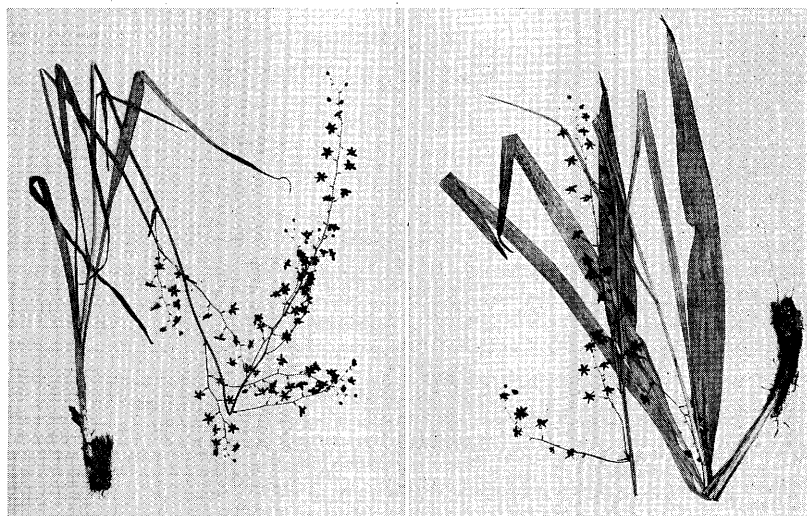


Fig. 1. *Veratrum maackii* var. *maackioides* from Ikku, Kochi City, showing variation of leaf width.

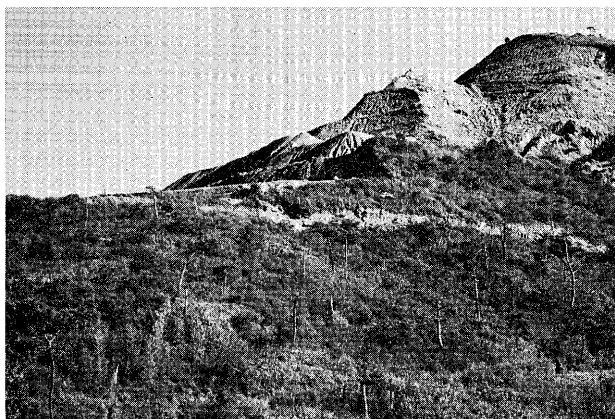


Fig. 2. The serpentinite area in Ikku, Kochi City, where *Veratrum maackii* var. *maackioides* is found (Nov. 1986).

土佐神社から東へ少し行くと海拔約 60 m の大坂越があり、南国市岡豊（おこう）町（かつては長岡郡岡豊村）との境になる。このあたりは蛇紋岩地帯で、ホソバシユロソウは 30 m 前後から、アカマツ、トサミズキ、イブキシモツケ、ホソバコツクバネウツギ、ナガバノコウヤボウキなどの多い斜面や小さな谷すじに生えている。葉の幅が 2 cm 以下の小さいもの（Fig. 1, 左）もあるが、一般に花序を含めて高さ 90 cm 以上、ときに 100 cm を超し、葉も幅が 2.5–4.2 cm になっていて（Fig. 1, 右）、蛇紋岩地帯にあるものとしては生育の良い個体が見られる。大きくても花はまばらにつき、花梗は 1–2 cm、花被は濃紫色で、ホソバシユロソウの特徴がはっきりしている。なお、大坂越の東約 3.5 km には岡豊山とよぶ蛇紋岩の小さな丘があり、大坂越よりは少ないがここにもホソバシユロソウが自生している。

四国のホソバシユロソウは 1000 m をこす山地のササ原や岩石地に生えているのが普通で、石灰岩地帯などで 500 m 内外で見られるところは低いほうである。石灰岩や蛇紋岩の多い高知市と周辺でも、一宮と岡豊以外には生育地がわかっていない。この 2 箇所は、歴史時代に入ってからすぐ近くまで海になっていて、ホソバシユロソウの自生地としては異常に低いといえる。

岡豊山のふもとを通り大坂越をこす国道32号ぞいの土地は、開発により状況が刻々と変わっている。岡豊山では城跡の発掘や公園化がすすみ、大坂越のあたりは大規模な採石で荒廃がとくにいちじるしい（Fig. 2）。このままでは、ホソバシユロソウとともに付近のトサオトギリ、ヤナギノギク、トサトウヒレンなどもなくなるかもしれないが、今なお何の対応もなされていないことを書きそえておく。

The place name, Schinomiyamura, the lectotype locality of *Veratrum mackii* Loesn. f. var. *maackioides* (Loesn. f.) Hara should be read as Ikkumura because of transcriptional error. (高知大学 教育学部生物学教室)

□日光の動植物編集委員会(編): 日光の動植物 774 pp. 1986. 枳の葉書房, 鹿沼. ¥16,800. 日光に野生する動植物についての解説書である。本書はⅣ部からなり, Ⅱが日光の植物で, 研究史・森林植生・垂直分布・地域ごとの植物の解説・植物目録からなっている。Ⅰは日光の自然の概説, Ⅲは動物で, Ⅳは自然破壊と保護の重要性にあてられている。日光の動植物を扱った類書には, 日光東照宮から発行された「日光の植物と動物」(1936)があるが, それ以後は, まとまったものはない。本書は, これとは全く別個に新しい見地で執筆されたものであると, まえがきに書かれている通り, 事実, 動物には現地調査に基づく研究の成果によるものが多い。大場秀章氏が編集した日光に生育する(帰化植物も含む)高等植物の目録は, 低山地帯・山地帯・亜高山帯・高山帯のどこに分布するかがわかるようになっており, この地方の植物相を概観するうえで大いに参考となる。景観・植物・動物のカラー写真も多く載せられており, 日光の自然の概要を知る上で格好の書と思われる。(秋山 忍)

□Hecht, M.K., B. Wallace & G.T. Prance (ed.): **Evolutionary biology**, vol. 20 472 pp. 1986. Plenum Press, New York. \$59.50. Evolutionary biology シリーズは 1967 年の vol. 1 以来, 生物科学のあらゆる分野の諸種の問題に関する review 論文や原著論文をのせて来て, 重要な文献となっている。今回は, このシリーズの初期から編集協力者として努力して来た Dr. W.C. Steere (ニューヨーク植物園名誉園長) の 80 歳を記念して企画されたものである。7 編の論文が集められていて, 最初に W.R. Buck による Dr. Steere の生いたち, 発表論文リストが紹介されている。他の論文は, Biochemical systematics: II. A reprise (D.E. Giannasi & D.J. Crawford); Species selection as a causal process (N.L. Gilinsky); Species are individuals: a review and critique of the argument (O. Riepel); A morphogenetic approach to the origin and basic organization of tetrapod limb (N.H. Schubin & P. Alberch); Developmental evidence for amphibian origin (J. Hanken); The origin of amphikinesis in lizard: a problem in functional morphology and evolution of adaptive system (T.H. Frazzetta) で, いずれも興味深い。とくに, “Biochemical systematics” は 200 頁を起す論文で, flavonoids, terpenoids, alkaloids など二次代謝産物から, nucleic acid, amino acid などにわたるまでの研究の現状と, それに対する著者らの解釈や批判がふんだんにあり, 読みごたえがある。(井上 浩)